



TITLE:

「脱男性化」とは何か:シュレーバーと性をめぐるディスクルス

AUTHOR(S):

熊谷, 哲哉

CITATION:

熊谷, 哲哉. 「脱男性化」とは何か:シュレーバーと性をめぐるディスクルス. 文明構造論: 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2006, 2: 61-82

ISSUE DATE:

2006-08-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/89708>

RIGHT:

「脱男性化」とは何か —シュレーバーと性をめぐるディスクルス—

熊谷 哲哉

1. 脱男性化するシュレーバー

ダニエル・パウル・シュレーバー（1842～1911）の唯一の著書、『ある神経病者の回想録』¹はこれまで多くの研究者により、さまざまな視点から解説が試みられてきた。これらの研究においてもっとも多く言及された問題とは、もちろんその「脱男性化」についてである。脱男性化とは、いうまでもないことだが、男性であるシュレーバーの身体が女性化してしまうという、一連の「妄想」あるいは「強迫観念」のことである。² 神とのあいだに不正に結ばれた神経接続により、人類滅亡後の世界で、シュレーバーは神の慰みものとしての、あるいは神の妻としての女性となることを運命付けられてしまう。このことこそが、シュレーバー自らが言う「神経病」であり、フロイトやラカンがその分析の対象とした「精神病」の中心的な病態である。

病としての脱男性化については、フロイトらを参照しながら、第2節において詳細に検討することになるが、ここではまず脱男性化がいかなる原因によって生じ、どのような経過で『回想録』の中心的エピソードとなっていたのかを、シュレーバー自身の記述から読み取ることしたい。

この脱男性化という概念は、シュレーバーが一度目の入院を終えたものの、みずからの

¹ 『ある神経病者の回想録』（以下『回想録』）からの引用は、Schreber, Daniel Paul: *Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken*. Gießen 2003 を使用した。引用については、ページ数のみを括弧内に示した。なお、訳出にあたっては、ダニエル・パウル・シュレーバー『シュレーバー回想録』（尾川浩／金関猛訳、平凡社 2002年）を参照した。

² ここでは便宜的に「妄想」の語を使うが、本論文において問題となるのは、取るに足りない、正常な思考とはまったく別物である、と通常考えられている「妄想」の内実に、どれだけの真実（あるいは現実）が含まれているか、ということである。

精神状態の悪化と病気の再発を危惧しながら眠れぬ夜をすごしたのちに、早朝の夢うつつの状態で、彼の精神に外部から入り込んできたのだという。

それは性交のさいに下になる女性となることも、またやはりなかなか素敵なことに違いないという考えであつた。このような考えは、私の気質にはまったく無縁のものであつたのだ。いうまでもないだろうが、しっかり目が覚めているときであれば、このような考えは怒ってはねつけただろう。私はこの間の自分の体験に照らしてみると、その考えを自分に吹き込んだ何かしら外部からの影響がそこに関わっていたのではないかという可能性を、頭から否定してしまうことはもちろんできないのだ。(36)

ここでのシュレーバーの記述は、いまだ予感でしかない。正確に言えば、予感でしかなかったころのことをのちに思い出している、ということだろう。この予感は、彼自身の世界全体をめぐる不安、つまり世界秩序の混乱³という問題と関連付けられて、彼の「神経の病」の中心的な問題となっていく。はじめにも書いたように、シュレーバーは神との間に分かちがたく結ばれた、神経接続によって、神経や精神を使つた活動への介入——言語による暴力——だけでなく、脱男性化されて、神との間に新たな人類を創出するべく、神の妻となる女性へと変えられることになってしまう。そしてこのことは、シュレーバーによれば、神と世界秩序の混乱を收拾する唯一の方法だというのである。

このような使命感に駆られて、シュレーバーは脱男性化を受け容れることになるのだが、それが最終的にどのような事態に至ったのか、すなわち完全に女性の体になったのか、そして神の子孫を産むことはできたのか、という問題についての結論は出ていない。そこにあるのは漠然とした予感だけである。脱男性化とは、フロイトや多くの研究者たちが着目したように、必ずしもシュレーバー一人だけの特殊な事例ではない。『回想録』に描かれた細部から、彼が生き、経験した時代が見えてくるのだ。エリック・L・サントナーは、シュレーバー論『私の個人的ドイツ』において、シュレーバーが提示した問題を、以下の

³ シュレーバーの世界において世界の創造主は神であるが、必ずしも世界は神の意図をすべて反映しているというわけではない。神やその被造物も含め、世界を統御しているのは「世界秩序」というシステムである。世界秩序の混乱は、人間の神経過敏のために、神と人間との距離が近くなりすぎてしまったことにある。そして世界秩序の秘密に気づいた主治医のフレックシヒが、神との神経接続を悪用し、天界における地位と権力を不当に奪取したのだとシュレーバーは推測している。

ように要約している。

シュレーバーの『回想録』は、ある意味で、これら一連の疾病に含まれた「19 世紀末から 20 世紀初頭において、どのような男性性が残っているのか」という問いに、先回りして答えようとした試みであるといえよう。シュレーバーの法律家という立場ゆえに、彼はこの問いに答えようとする努力は、疑いも無く、梅毒恐怖や人間学的偏見を超えて、彼自身の専門分野により近い腐敗の源へと、彼を導いたのである。⁴

サントナーのいう「男性性」とはなんだろうか。そして「腐敗の源」とは、いったいどういう意味なのだろうか。本論文では、男性性だけでなく、むしろ女性をも含めた性をめぐる全体的な語りを中心に、世紀転換期における性意識および身体観をめぐるさまざまなディスクルスから、シュレーバーの脱男性化について考察を進める。

2. フロイトの脱男性化理解とギルマンのユダヤ的読解

シュレーバー『回想録』についての先行研究は、はじめに述べたように、すでに膨大な数にのぼる。大著『群集と権力』の最後に、シュレーバーについて言及したエリアス・カネッティは、「最初に読んだときから、彼の女への変身という観念が、その狂気の神秘的な中心をなすものだとなしたくなるだろう」と述べている。⁵ カネッティの言を待たずとも、彼の女性への変身は、その妄想的 세계観の中心として、これまで考えられてきた。シュレーバーについての最も早い論考である、フロイトの「自伝的に記述されたパラノイア（妄想性痴呆）についての一症例に関する精神分析的考察」（1911 年）⁶こそが、「脱男性化」を中心的な問題として捉える、その後のシュレーバー解釈に決定的な影響力をもってきたし、そしていまだもち続けていることは言うまでもない。

フロイトによる脱男性化理解とは、抑圧された同性愛願望という一言に集約することができよう。フロイトは、論文の第一節において、『回想録』の世界を概観し、それがどの

⁴ Santner, Eric L.: *My own private germany Daniel Paul Schreber's secret history of modernity*. New Jersey. 1996, p.9.

⁵ Canetti, Elias: *Masse und Macht*. München. 1960, S. 534.

⁶ Freud, Sigmund: *Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides)*. In: Studienausgabe Bd. VII. Frankfurt a.M. 1994.

ような原理によって動いているかを詳述した結果、シュレーバーの妄想における主要部分を、女性への変身と神との特別な関係であり、この両者がシュレーバーの神に対する女性的な態度において結びつくとしている。この結びつきの「本質的、発生的関係」⁷を解明することが、この論文の課題として掲げられる。

第2節において、フロイトは、この論文において最もよく知られているテーゼ、すなわちシュレーバーのフレックシヒに対する同性愛的願望という自説を展開している。

同性愛的リビドーの突出こそが、この病気の動因であり、その対象はおそらく初めから主治医のフレックシヒに向けられていたであろう。このようなリビドー的興奮に対するたたかいこそが、疾病現象を引き起こした根源的な葛藤を発生させたのである。⁸

以後、フロイトはシュレーバーの経歴、家族関係、疾病の進行などの要素を考慮しながら、彼自身の予測を証明してゆく。フロイトの言うところをまとめれば、シュレーバーにおける愛着の対象とは、神のもう一つの姿であるフレックシヒであり、また彼の父モーリツ・シュレーバーについても、太陽こそが、父の象徴化された姿であるとしている。⁹

さらに第3節ではパラノイアのメカニズムについて説明されているが、これはシュレーバー自身の症例を解明するというよりは、シュレーバー症例から得られた考察として、パラノイアの特徴である、同性愛願望とその抑圧から発する迫害妄想¹⁰について、それが生じる過程についての考察にあてられている。

このようなフロイトの精神分析および、「シュレーバー症例=同性愛願望」説に対する評価はさまざまであるが、すくなくともどのような形であれ、シュレーバーを語る際には、フロイト論文とフロイトが考えた同性愛の問題について言及せざるをえないともいえる

⁷ Freud: S. 161.

⁸ Ebd., S.169.

⁹ Ebd., S.179.

¹⁰ 「私たちは、パラノイア（あるいは妄想性痴呆）の特質を、別のところに、すなわち症状の特殊な現象形式に求めなければならない。そして私たちの期待するところでは、このような症状の形式は、さまざまなコンプレクスによるのではなく、症状形成の、あるいは抑圧のメカニズムによって引き起こされるのである。私たちは、パラノイア的特性とは、同性愛的願望の空想に対する防衛として、パラノイアに特有の迫害妄想的な反応をともなっており、という点にあるのではないかといったものだ。」 Ebd., S. 183.

だろう。ラカン、ドゥルーズ=ガタリ、キットラー、サントナーなど、20世紀後半の多くの研究者が、このフロイト的読解、あるいはフロイトの精神分析に対して批判的検討を加えてきた。これらの研究者たちの多くは、シュレーバー『回想録』の新たな読みを提示するというよりは、むしろフロイト的精神分析の乗り越え、あるいは新たなパラダイムの提示を目的としてきたのだ。

これまでのシュレーバー解釈の歴史のなかで、独自性においてぬきんでているのが、カネッティの『群集と権力』である。カネッティは、フロイトの説に対して真っ向から反対している。

しかしながらこれ以上の大きな誤りはほとんど考えられまい。あらゆることが、パラノイアの原因となるのだ。¹¹

カネッティによれば、パラノイアの本質とは、「妄想の構造およびその内容物」¹²であり、この点に着目することで、『群集と権力』のテーマである権力者のメンタリティと、パラノイアとの類似性¹³を論証することができるというのだ。

また、フロイトおよびその批判者たちがほとんど考慮しなかった側面から、シュレーバーを読み解いたのが、サンダー・L・ギルマンである。ギルマンは『フロイト、人種、ジェンダー』をはじめ、多くの著作においてシュレーバー症例とそのフロイトによる読解について言及している。ギルマンによれば、シュレーバーの『回想録』におけるもっとも重要なストーリーとは、「脱男性化」ではなく、反ユダヤ主義であるという。ギルマンは、フロイトが意図的に避けた、シュレーバーにおける反ユダヤ主義的言説を追跡し、その重要性を指摘している。

フロイトが発表した、シュレーバー症例の「科学的」な解釈は、その反ユダヤ的レトリック——たとえばさまよえるユダヤ人というライトモチーフ——に言及することを、

¹¹ Canetti: S. 534.

¹² Ebd.

¹³ カネッティは最終的に、シュレーバーにおける身体の不可侵性の確立、および自分以外の人間が死んでしまえばいいという願望を読み取り、それを権力者と比較し、「パラノイア患者は権力者の生き写し」であると述べている。Ebd., S.549.

完全に避けているのだ。それはすくなくとも、初めて読んださいには、ダニエル・パウ
ル・シュレーバーの自伝における強力なサブテキストであるように思われるのに。¹⁴

たしかにギルマンがいうように、『回想録』には、「永遠のユダヤ人」、¹⁵ 「ユダヤの胃」¹⁶
などのレトリックが見られる。ギルマンは、シュレーバーの脱男性化を、アーリア人男子
であるシュレーバーが、当時ドイツの胎生学においてもっとも下層の段階に位置づけられ
ていたユダヤ人¹⁷ へと作り変えられようとしていることの不安であると推測している。で
は、なぜ「脱男性」化することが、同じ男性であるユダヤ人男子となることなのだろうか。
男性性を失うことが、ユダヤ人となることなのだろうか。人種論については、次節でふた
たびとりあげるので、ここではギルマンによるフロイトへの批判というコンテキストに限
定して、彼の思考を追ってみることにする。

フロイトは、幼児期には両性的であった人間が、年月を経るにつれて男性と女性のそれ
ぞれに分化するのが通常であるという立場をとった。シュレーバーにせよ、他の症例にせ
よ、ヘテロセクシュアルという規範にみずからを順応させることができなかったことが、
発病の最も大きな要因となるというのだ。¹⁸ そこには、ハンス・ブリューアーやマグヌス・
ヒルシュフェルトらが考えたような、器質的に含まれている同性愛志向、つまり第三の性
としての同性愛者という発想¹⁹ は、そもそも排除されている。ブリューアーやヒルシュフ

¹⁴ Gilman, Sander L.: *Freud, Race and Gender*. Princeton, 1993, p.143. なお訳出にあたっては、ギ
ルマン『フロイト・人種・ジェンダー』（鈴木淑美 訳）青土社 1997 年を参照した。

¹⁵ Schreber: S. 53.

¹⁶ Ebd., S. 151.

¹⁷ ギルマンは、『病気と表象』において、フロイトが医師としてのキャリアを歩み始めた世紀転換期ご
ろのドイツ生物学におけるユダヤ人の位置を解説している。19 世紀ドイツの生物学においては、人間
の胎児にこそ、「最高」の生命形式が見られ、その形態のなかには、あらゆる生命の発展段階を見るこ
とができると考えられていた。このイデオロギーを代弁するのが、「個体発生は系統発生を繰り返す」
というヘッケルの言葉である。この言葉には、人間があらゆる生命体の中で最高位にある、というこ
とだけではなく、それと平行して人間という種の内部における序列をもまた暗示されていた。この序
列において、ユダヤ人とは進化という「存在の大いなる連鎖」の最下層の段階にあると考えられてい
たのである。サンダー・L・ギルマン『病気と表象——狂気からエイズにいたる病のイメージ』（本橋
哲也 訳）ありな書房 1997 年、272 頁参照。

¹⁸ フロイトはシュレーバー症例についての論文の第 2 章においてこのように述べている。「一般に人間
は、一生の間、ヘテロセクシュアルとホモセクシュアルの感覚の間をゆらぐ。そして一つの側に対す
る諦めと絶望が、人を他方へと押しやるのだ。」Freud: Ebd., S.171.

¹⁹ ヒルシュフェルトの業績については、谷口栄一「マグヌス・ヒルシュフェルトと科学的人道主義委

エルトは、同性愛を生まれつき身体に備わった気質、すなわち体質の強弱、特定の疾病へのかかりやすさなどといった特徴と同質のものと考えようとした。²⁰ これは、フロイトにとっては厄介な問題であった。なぜなら、当時の医学文化の世界では、人間のあらゆる差異を顕在化することが、人種の優劣、とりわけユダヤ人の劣等性を証明することにつながっていたからである。²¹ 大きな足と鼻は、ユダヤ人の未発達性と結びつけて語られた。それは性的な問題についても例外ではなかった。ユダヤ人の割礼を受けた性器は、去勢を連想させ、精力の弱い女性的な（あるいは性的に病んだ梅毒のイメージをともなった）ユダヤ人像を作り上げていたのである。この未発達のユダヤ人になること、すなわち進化の頂点に立つアーリア人男子という地位からの転落の恐怖こそが、シュレーバーの病だったのだと、ギルマンはいうのだ。²²

ギルマンは、フロイトが身体的特徴としてのユダヤ性について言及したり、シュレーバーの女性化不安を反ユダヤ主義と結びつけたりすることを避けようとしたことを、フロイト自身のアイデンティティについての防衛反応であると述べている。²³ たしかにフロイトは「自伝的に記述されたパラノイアの一症例」論文においては、シュレーバーの反ユダヤ主義的レトリックについては何も語らずに、むしろ人種的・器質的問題をすべてジェンダーの問題へと置き換えている。しかしながら、フロイトは決して、器質としてのユダヤ性を無視しているわけではない。それについては、「月経のある鼻」に関するフロイトとフリースの往復書簡、そしてヴァイニンガー『性と性格』の出版に伴う、フリースとの訣別といった出来事からも窺い知ることができよう。²⁴ フロイトがユダヤ人として、精神

員会(WhK) [大阪府立大学『大阪府立大学言語文化研究』3号(1997年)、21～33頁]を参照。

²⁰ ブリュエアーやヒルシュフェルトにとどまらず、この時代ほとんど同性愛とは、気質的疾患であると考えられていた。たしかに同性愛者になる要因として、寄宿舎における自慰などの倒錯行為の伝達によって後天的に同性愛的志向を持つようになる場合も問題となっていたが、事例としては先天的な方が多いと考えられていたという。そして後天的な同性愛者のほうは、むしろ擬似的同性愛として厳しく取り締まられた。ジョージ・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ 市民階級とナチズム』(佐藤卓己/佐藤八寿子 訳) 柏書房 1996年、50頁以下参照。

²¹ サンダー・L・ギルマン『ユダヤ人の身体』(菅啓次郎 訳) 青土社 1997年、69頁。

²² Gilman: a.a.O., S.142.

²³ Ebd., S. 146.

²⁴ 耳鼻科医であったフリースは、鼻と人体の周期性に関心を持っており、23と28という二つの数字が、それぞれ男性的要素と女性的要素に関連していると考えていた。この数字とともに、フリースは、人間の両性性について研究を進め、フロイトとの往復書簡において、親密に意見を交換合っていた。しかしながら、このフロイトに話した、両性性についての着想が、その弟子スヴォボダを介して、オ

分析を語ることには、大きな困難があった。ユダヤ人としての特殊性への探究心と、科学的合理性との間に引き裂かれたフロイトの困難を、ギルマンは次のようにまとめている。

精神分析をユダヤ人の病と見ること、つまりユダヤ人の病をユダヤ人が治すということは、医学的植民地化というこのモデルに対してフロイトが見せた一種の抵抗であったといえる。しかしこれには、自らの内部にあるユダヤ人を、今や中立化した科学の言説で抑圧しなければならなかった。このことは、ユダヤ人になるという不安をシュレーバーが内面化したことと、精神病との間の明白な関連を通じた創造的な抑圧によって成し遂げられたのだ。フロイトがヒステリー患者の病歴を読むにつれ、シュレーバーは、世紀末ウィーン社会において医師であると同時にユダヤ男性である、というフロイト自身のアイデンティティの不安を表象するようになったのである。²⁵

以上のように、サンダー・L・ギルマンの『フロイト・人種・ジェンダー』を中心に、そのフロイト批判と、シュレーバーの『脱男性化』についての挑発的な読解の内容をまとめた。たしかにギルマンのフロイト批判は的確であるが、ほんとうにシュレーバーの「脱男性化」は、ユダヤ人男子への頹落であると言い切れるのだろうか。ギルマン自身が述べているように、シュレーバーのテキストには、同時代の反ユダヤ主義のみならず、さまざまな思想が反映されている。²⁶ また、フロイトがみずからのユダヤへの執着を抑圧して「科学」の言語で精神分析を語ったように、シュレーバーが、自らの語りを素人仕事であると断りながらも、「科学的」合理性をともなった普遍的な理論へと高めようとしていたことも、²⁷ 同様に問題性を持っている。²⁸

ットー・ヴァイニンガーの『性と性格』に反映されていたことを知ったフリースは、スヴォボダとヴァイニンガーを剽窃のかどで非難し、フロイトと訣別することになった。このあたりの経緯については、アーネスト・ジョーンズ（ライオネル・トリリング／スティーヴン・マーカス 編）『フロイトの生涯』（竹友安彦／藤井治彦 訳）紀伊国屋書店 1969年、195～216頁、およびフロイト（ジェフリー・M・マッソン 編）『フロイト フリースへの手紙』（河田晃 訳）誠信書房 2001年を参照。

²⁵ Gilman: S. 167.

²⁶ Ebd., S. 147.

²⁷ シュレーバーは、みずから新たな学問体系を構築するつもりはないとしながらも、その体験から得られた新たな世界観や宗教的知見が、きっとのちの世の人々にとって大いに役立てられるだろうと確信をいっている。『回想録』には「一つの学術論文としての規模に達している現在の著作」（133）、「このような根本的見解を学術的に根拠付ける」（252）、「あらゆる人間的な学問を超越する」（410）

次節では、ユダヤ人問題にとどまらず、広く世紀転換期における人種論、性科学、精神医学などの言説を追ってみることにする。

3. 人体計測者たちの不安と性の動揺

世紀転換期における人類学において、もっとも重視されたのは、見ることである。個々の個体を見て、その差異を計測し、個体差と種族差を顕在化すること、これこそが、かれらにとっての研究活動の根幹であった。

ガルの骨相学を発展させたイタリアの犯罪学者ロンブローゾは、生来犯罪者説を唱えたことで知られている。ロンブローゾの関心は、単に生まれながらの犯罪者を特定するだけにはとどまらず、頭蓋骨の特徴や脳の容積を測定し、その平均値から、職業・階層・人種、そして男女と、さまざまなカテゴリーのもとに、人間の優劣を秩序化したのである。このような言説は、もちろん全面的に社会に受け入れられたわけではないが、²⁹ そのインパクトは医学、生物学、心理学など周辺分野全体を巻き込んだ大きな動きへと波及した。

ユダヤ人であったロンブローゾは、のちに自らの出自だって、墮落した、未発達ユダヤ人ではないか、という批判を受け、それに対する反論として『現代科学に照らした、反ユダヤ主義とユダヤ人』を発表した。ロンブローゾはこの著作で、ユダヤ人とヨーロッパ人の本質的な差異、その優劣を否定する意図を持っていたが、逆に癌や精神病になる確率が他の民族よりも高いことを認めている。この原因は、ユダヤ人の頭脳が高度に発達してしまったためであるとしている。³⁰ このようなロンブローゾの論法は、ユダヤ人の器質的

というように、学術的知識を意識した記述が多く見られる。

²⁸ もちろん、このような「科学」性や「普遍」性それ自体も、問題である。トマス・ラカーは『セックスの発明』において、男性と女性を別の身体として語る、ツーセックスモデルが成立してきた歴史を語っている。そこでフロイトは女性の性感帯の移動という現象に、社会的意味を与え、女性身体は、男性身体の変換ではなく、女性は男性との生殖という社会的要請のために、女性身体へと変えられるという現実を確認したとされている。フロイトが科学の言説で語ったことは、神経学的・解剖学的真実ではなく、社会的・文化的現実だったのである。トマス・ラカー『セックスの発明 性差の観念史と解剖学のアポリア』（高井宏子／細谷等 訳）工作舎 1998年、312頁以下参照。

²⁹ ロンブローゾの生来犯罪者説は、反響を引き起こしたものの、ドイツ以外の国においては冷遇されたという。なにによりその表面的な形態学にはたいした根拠がなく、彼の方法論は、犯罪人類学の信用を傷つけたとも言われた。ビエール・ダルモン『医者と犯罪者——ロンブローゾと生来犯罪者説』（鈴木秀治 訳）新評論 1992年、132頁。

³⁰ Lombroso, Cesare (übersetzt von H.Kurella): *Der Antisemitismus und die Juden im Lichte der modernen Wissenschaft*. Leipzig. 1894, S.103.

欠陥を認めるとともに、自らの方法論の脆弱性をもさらけ出すことになってしまったといえよう。

人類学者たちが、計測と差異化を試みたのは、人種だけではない。彼らは多くのデータから、男女の優劣についても論じている。唯物論者カール・フォークトや、局在説と失語研究で知られていたポール・ブローカからは、男女合わせて数千例にものぼる脳の重量を計測し、その結果として、最も軽い男性の脳でも、最も重い女性の脳よりも重量がある、というデータを提出した。³¹ ロンブローゾもまた、脳の軽い、すなわち知性の段階が低い人間を、生来犯罪者であると考えたため、女性、とりわけ売春婦が犯罪者の要素をもっているとしている。³² ここで重要なことは、彼らの推論や観察には、そもそも始める前から答えが出ているということである。男性の優越性という、彼らが証明したくてしょうがない、彼らにとって都合のいい結論を導くために、計測を続けたのだ。では、彼らにとっては自明の結論を得るためだけに、なぜこれほどの量のデータが必要だったのだろうか。何が計測する人類学者たちを突き動かしていたのだろうか。

シンシア・イーグル・ラセットはこの問題について、次のように指摘している。

科学者および科学の進歩に敏感な者たちは、進化上の失敗例、つまり人間としての感性に到達しなかった人々に取り憑かれてしまったのである。自然はときに警告もなしに、情け容赦ない仕打ちをするのだということを、「進化から見捨てられた人々」、あるいは女性、未開人、そしてことに犯罪者などが、絶え間なく思い起こさせた。つまるところ人間も高度に発達した猿に過ぎないのだとしたら、ちょっとした進化の気まぐれ、先祖の自己管理の欠如、怪我や病などによって、人間以下の存在へと転落するかもしれぬという恐ろしい可能性が現れる。³³

³¹ Russett, Cynthia Eagle: *Sexual science the victorian construction of womanhood*. Cambridge/ London. 1989, S. 35.

³² ロンブローゾは、『女性犯罪者、売春婦、普通の女性』において、身体的・解剖学的特徴から、女性が男性よりも肉体的・精神的に劣っていて、子供や動物に近いものであると述べている。Vgl. Lombroso, Cesare (translated and with a new introduction by N. H. Rafter/ Mary Gibson): *Criminal woman, the prostitute, and the normal woman*. Durham/ London 2004.

³³ Russett: Ebd., S. 63. なお訳出にあたっては、シンシア・イーグル・ラセット『女性を捏造した男たち——ヴィクトリア時代の性差の科学』（上野直子／富山太佳夫 訳）工作舎 1994年を参照した。

この不安を克服するためには、自分たちが「進化に見捨てられた人々」よりもどれほどすぐれているか、遺伝的にどれほど隔たっているのかを証明し、進化における退行の可能性を限りなく少なくすることが必要だったのである。

19世紀後半に、「時代の病」とされていた神経衰弱もまた、人々を不安に陥れた。³⁴ 神経衰弱が、のちの世代に遺伝し、将来的には白痴へといたるという説が、ロンブローゾやクラフト=エビングをはじめ、多くの研究者に支持されていたのだ。³⁵ また、神経科医メービウスは、女性の劣等性を論じた著書『女性の生理学的な精神薄弱について』のなかで、女性が自由を求めたことが、現代の退廃である神経症につながり、神経の状態が不安定になると、男性的要素と女性的要素の割合が混乱してしまうと述べている。³⁶ メービウスが激しい口調で、男性にとっての女性の劣等性をまくしたてている一方で、彼自身が述べているように、男性性と女性性の境界は、ますます混乱していったのだ。

女性の身体における男性的要素と女性的要素の混交状態、あるいは女性の身体や行動に対する新たな意味づけは、この当時に流行し、のちの精神分析の生成に寄与した催眠術においても、同様に問題とされたことだった。クラフト=エビング、アルベルト・モルらと同時期に、催眠療法を用いたミュンヘンのシュレンク=ノッチングは、彼らと異なり、同性愛などの性的逸脱はある程度器質によるものであっても、決して治療不可能なものではなく、催眠療法によって治癒可能であると考えていた。³⁷ 彼は盟友の性科学者イヴァン・ブロッホにより、「ドイツにおける性科学の創始者の一人」としてフロイトと並んで高く評価されている。³⁸ しかしながらシュレンク=ノッチングの名は、今日性科学者と

³⁴ 神経衰弱とは、1880年代にアメリカのベアードによってヨーロッパにもたらされ、普及した用語である。神経衰弱の流行の原因として、ベルリンやライプツィヒにおける急激な都市化が挙げられるが、性科学者イヴァン・ブロッホは、大都市の「震動」が、人々の神経を弱らせ、性的逸脱が生じる原因となっていると述べている。モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』、45頁。

³⁵ 親の代の獲得形質が、子に受け継がれるという発想、すなわち「退化」は、この時期においてかなり広く信じられていた。退化概念の代表的な信奉者として、ラセットはモレル、モーズリー、ロンブローゾ、クラフト=エビングらを挙げている。Ebd., S. 67.

³⁶ Möbius, Paul J.: *Über den physiologischen Schwachsinn des Weibes*. Halle a.d.S. 1901, S. 17.

³⁷ Schrenk-Notzing, Albert von: *Kriminalpsychologische und psychopathologische Studien*. Leipzig. 1902, S. 3.

また、フロイトは『性理論三篇』の脚注において、性的な逸脱に関する先行研究として、シュレンク=ノッチングをはじめ、ヒルシュフェルト、ブロッホ、モル、メービウス、エリスら『性的中間者年鑑』に参加していた人々の名前を挙げている。

³⁸ Bloch, Iwan: *Das Sexualleben unserer Zeit in seinen Beziehungen zur modernen Kultur*. Berlin.

してよりもむしろ、実験的オカルティストの代表的人物として広く知られている。カール・デュ・プレルとともに、ミュンヘンの心靈主義サークルを率いた彼は、催眠実験や霊媒による交霊実験を通じて、無意識状態における人間の能力を探究していた。³⁹

トマス・マンは、シュレンク - ノッチングの交霊会に参加した体験を、『オカルト的集会についての三つの報告』にまとめている。その中でマンは、霊媒ヴィリーに、エルヴィンとミンナというふたりの人物の霊が憑依し、その人格が入れ替わるさまを記録している。⁴⁰ マンがいうように、トランス状態に陥った霊媒には、しばしば性的に放埒な行動や身振りを見せることがあった。このことについて、ウルリヒ・リンゼは、霊媒たちは社会のルールに縛られない新たな役を演じたのだと述べている。⁴¹

以上のように、この節では、反ユダヤ主義や人種論にとどまらず、人間の身体と性をめぐるさまざまな言説について論じてきた。この時代に、人々の性をめぐる見解は揺らぎ、身体への違和感と懐疑が高まっていた。光線によってずたずたに引き裂かれ、操られるシュレーバーのように、⁴² 人々の身体は解体されつつあり、またそのつど再構成されていたのである。おそらくここで挙げた言説のうちの一部は、実際にシュレーバーの知るところであったであろうし、この時代を生きた人々の、性や身体への不安については、彼もまた問題を共有していたはずである。しかしながら、まだこれだけでは、シュレーバーの「脱男性化」について説明したことにはならない。次節では、ふたたびシュレーバーのテキストにもどり、そこにおける身体の拡張と、脱男性化のもう一つの大きな目的である生殖の意味について考察を進めたい。

1919, S. 772.

³⁹ 当時の性科学や精神医学とオカルティズムとは、強く結びついていた。シュレンク - ノッチングだけでなく、ロンブローゾ、デソワール、ユング、そしてフロイトもオカルティズムに関心を示している。Vgl. Treitel, Corinna: *A science for the soul occultism and the genesis of the german modern*. Baltimore/ London. 2004.

⁴⁰ Mann, Thomas: *Drei Berichte über okkultistische Sitzungen*. In: *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Bd.XIII. Frankfurt a. M. 1974, S. 35.

⁴¹ Pytlík, Priska: *Okkultismus und Moderne Ein kulturhistorisches Phänomen und seine Bedeutung für die Literatur um 1900*. Paderborn/ München/ Wien/ Zürich. 2005, S. 75., Linse, Ulrich: *Geisterseher und Wunderwirker*. Frankfurt a. M. 1996, S. 15.

⁴² Vgl. Schreiber: S. 152.

4. 生殖と脱男性化

脱男性化については、第2節でも述べたように、同性愛的願望の抑圧というフロイト的な図式が、これまでのシュレーバー解釈の主流となっていたが、ロターヌはそのような見解に対して重要な異議を唱えている。

シュレーバーはたしかにセクシュアリティの重要性という点についてはフロイトと「偏見」を共有するだろうが、シュレーバーが自らの症例についてもフロイトの見解に同意することはない。なぜなら、実際のところシュレーバーはテキストのどこにも、ホモセクシュアル的欲望それ自体、つまりほかの男に対する欲望については語っていないからである。その代わりに彼は繰り返し、自らが女性に代わっていくことへの希望的な信念を語っている。それはシュレーバーの官能性についての理解を支配するような、主体としてのジェンダーであり、欲望の対象ではないのだ。⁴³

患者が語らないことを読み取るのが、精神分析の方法論であるのは当然のことだが、シュレーバー本人が語らなかったことをめぐってあれこれと詮索を続けるのも、いかなるものだろうか。本論文では、なによりシュレーバー自身が語る言葉に注目したい。シュレーバーが脱男性化において見出したのは、自らの性的対象としての男性神ではない。あくまで神にとっての性的対象である女性へと変えられつつある自分であり、魂の官能的快楽を感じる主体としての自分である。この節では、女性化されながらも男性の身体を持っている、性的主体としてのシュレーバーに着目する。

性的主体としてのシュレーバーとは、言い換えれば、自らの女性化を記述するシュレーバーである。具体的に彼は、男性器の溶解、乳房の膨張、背骨の縮小、腰周りの肉付きの変化、などを自らの身体の上に生じたこととして記述しているのだ。これらの変化ははじめには女性神経の挿入によって生じ、さらには（おそらく女性神経と同じ性質のものと思われる）官能神経が彼の全身を覆いつくしてゆく。シュレーバーは、王立病院に宛てた手紙において、自分の身体表面に進行している女性化について説明している。

⁴³ Lothane, Zvi: *In defense of Schreber*. New Jersey 1992, S.436.

私にとっては、こういった器官（官能神経）が自分の身体に——これまで繰り返し述べてきた見解のとおり、神の奇跡によって——普通は女性の体においてしかありえないほどに大量にあるということは、主観的に確かなのです。私は、ある任意の場所を手で静かに触ると、表皮の下に糸状ないしは筋状の構成物があるのを感じるのです。

（中略）私はこの構成物こそが、私がいつも私自身の身体に感じ取っている、女性の肌に特有の柔らかさをもたらしめているのだと考えてよいと思っております（277）

光線たちによって挿入された女性神経は、明確な「糸状ないし筋状」の構成物として、シュレーパーに女性的特徴を与えるようになるのだ。いうなれば、細胞レベルでシュレーパーの女性化は進行している。⁴⁴

細胞における性差について述べているのが、かのオットー・ヴァイニンガーである。その着想がフリース（およびフロイト）の両性性理論によるものかもしれないということは、すでに述べたとおりだが、彼はあらゆる人体に含まれる男性原形質と女性原形質の割合が、男女の性差を決定する要因であると考えている。

それぞれの独立した器官や、それぞれの細胞には、男性原形質と女性原形質の間のどこか一点に見出されるようなセクシュアリティがあるということ、そしてそれゆえ、基本的な構成要素は、決まった形と決まった程度において性的に特徴付けられているということ、これらの証拠は、同じ器官の異なった細胞は決して同じくらいに強い性的特徴をもたないという事実から、容易に導くことができよう。⁴⁵

このようなヴァイニンガーの主張はさきほどのシュレーパーの引用とかなり近いところにあることがわかるだろう。ヴァイニンガーが、当時の女性嫌悪の言説を、それこそ聞き

⁴⁴ 神経における男女の差異について、ハヴロック・エリスは、女性の神経のほうが男性よりも広範囲にわたって張り巡らされていると述べている。しかしながら、エリスの見解はシュレーパーと異なり、女性の神経は広く浅く、男性の神経は狭いがより強く反応するというものであった。また、クラフト＝エビングらは、男女の特徴は、その脳の性質が男性性、女性性どちらの成分を多く含んでいるかによって決定されていると考えた。このように、当時の精神医学において、細胞や器質のレベルにおける男女の区別も問題は、盛んに議論されていた。ローレンス・バーキン『性科学の誕生 欲望／消費／個人主義 1871-1914』（太田省一 訳）十月社 1997 年参照。

⁴⁵ Weininger, Otto: *Geschlecht und Charakter*. München.1980, S. 21.

かじりの知識まで動員してこの本を書いたことを考えれば、同時代のさまざまな言説と都市のノイズを、区別すること無しに受け容れていたシュレーバーとの親和性は明らかである。⁴⁶ ヴァイニングは、女性が男性を誘惑し、墮落させるのだと考え、女性の存在自体を否定してしまうのに対し、シュレーバーはみずからの女性化を、気持ちの上では拒みながらも、受け容れ、やがてみずからの子孫を見ることになる。

それ（シュレーバーの精神から生まれた新たな人類）——身体的には私たち地上の人間よりもずっと小さかった——は、すでに注目に値する文明的段階に達しており、とりわけその小さな身の丈にふさわしい、小さな牛を飼っていたという。（115）

これもおそらく、シュレーバーのもとにやってくる光線たちが見せた、多くの幻影のひとつであったのかもしれない。シュレーバーの描く未来は、最後の章にいたるまで、脱男性化が完成し、「神による受精を経て私の胎から子供が生まれてくるかもしれない」し、あるいは「私の名前」が「何千もの人にも与えられなかったような名声を得る」（293）ことになるかもしれない、という両義的なものであったのだ。

しかしながら脱男性化の目的の一つとして、「新たな人類の創造」が含まれていることにここでは注目しておく必要がある。この新たな人類という語は、世紀転換期における生改革運動からファシズム期におけるドイツで、盛んに論じられた人種の純粋性の保持や人種の改良といった議論を思い起こさせる。

生改革運動の主要な目的は、むしろ都市生活で荒廃した精神と身体を改善することにあったが、それは同時に人種の改良をも意味していた。改革運動に関わった多くの人々に、優生思想的な志向性が見られるが、ここではその一例として、裸体主義者のウンゲヴィッターを挙げておこう。ウンゲヴィッターは、雑誌『裸体』などを発行し、裸体主義の普及につとめたが、彼が裸体生活に求めたものは、肉体の健康と美だけではなかった。彼の掲げた綱領のなかには、北欧人との協力による、人種の改良、すなわち金髪・碧眼のアーリ

⁴⁶ シュレーバーの語る世界が、彼自身の想像によるものではなく、外的に語られた言葉に基づいていることは、彼自身が指摘している。シュレーバーは光線たちの語りによって世界のシステムに洞察をめぐらせ、「何かしらそれらの言葉と結びつく現実的な根拠があり、歴史的な事件と関係があるに違いない」（203）と考えている。

ア人種の維持という項目も含まれている。⁴⁷ これは、のちのナチズムの時代に、「生命の泉」プロジェクトとして実際に行われることになる。

また、シュレーバーに大きな影響を与えたと考えられる一元論的自然科学やオカルティズム⁴⁸の領域においても、新たな人類あるいは、これからの人類の問題は、しばしば言及されている。『回想録』で何度も名前を挙げられている、ミュンヘンの心霊研究者カール・デュ・プレルは、哲学的に死後の人間の生について語り、あまり現実社会の問題に関与していなかったように思われるが、彼もまた優生思想の影響を受けていたことが指摘されている。⁴⁹ またエルンスト・ヘッケルは、近年の精神病患者数の増大をあげ、直る見込みのない患者を生かしておくことは、家族と国家の損失につながるから、安楽死させるべきであると述べている。⁵⁰

さらには、20世紀以後の神智学的オカルティズムの動きが、アーリア神話を取り込みながら、ナチズムを背後から支える物語へと高められていったことは、いうまでもない。⁵¹ そのような流れの発端ともいえるのが、ランツ・フォン・リーベンフェルスによるオカルト人種論である。⁵²

ランツ・フォン・リーベンフェルスは、『回想録』が書かれたのとはほぼ同じ時期、1906年に、『神聖動物学』という著作を発表している。ランツはここで、人類は獣姦によって墮落してしまったが、原人類は神と同様に、高位の種であったと述べている。そのうえで、

⁴⁷ 竹中亨『帰依する世紀末 ドイツ近代の原理主義者像』ミネルヴァ書房 2004年、220頁。

⁴⁸ シュレーバーにおける自然科学とオカルティズムの影響については、拙論「光線としての言葉—シュレーバーと自然科学と心霊学—」：『文明構造論』京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野 2005年、23頁～46頁所収を参照。

⁴⁹ デュ・プレルは、時空を超えた人間の意識としての、「超越論的主体」の存在を探究しながら、その一方で、昨今の犯罪者の増加については、その去勢手術をするべきであるし、さらには、早期教育による人種改良を提案している。このような人種改良の発想は、彼の盟友であるヘレンパッハの影響が大きい。ヘレンパッハは、人口抑制のために新生児を青酸カリによって殺すことを提案している。

Zawicki, Diethard: *Leben mit dem Toten Geisterglauben und die Entstehung des Spiritismus in Deutschland 1770-1900*. Paderborn/ München/ Zürich/ Wien. 2002, S:334.

⁵⁰ Haeckel, Ernst: *Die Lebenswunder*. Jena. 1923, S. 99.

⁵¹ Vgl. Goodrick-Clarke, Nicholas: *The occult roots of nazism*. London/ New York. 2004, S. 97.

⁵² ランツはシチリア島メッシーナ生まれでヨハン・ランツ・ドゥ・リーベンフェルス男爵の子であると自称していたが、実際は教師ヨーハンの息子、アドルフ・ヨーゼフ・ランツとして1874年にヴィーンに生まれている。ランツ・フォン・リーベンフェルスという名は、スイスの貴族からとって、1903年ごろから彼が名乗りだしたが、本当にフォン・リーベンフェルス一族と関係があるのかどうかは、はっきりしていないという。Ebd., S.90, 106.

彼は種の改良を実行し、神の地位へと復帰することを目指したのだ。彼の理論は、アーリア神話の伝統に則った誇大妄想であるばかりでなく、シュレーパーと同様、世紀転換期の技術的進歩のキーワードをも取り込んでいる点で非常に興味深い。ランツは、シュレーパーが神経によって世界を感知したように、脳幹の松果体が電氣的感覺器官であるとしている。⁵³ このことは、そもそも人間が電氣的な刺激によって、交信していたことを意味しているというのだ。この電氣による交信という発想は、電氣による生殖へと飛躍する。⁵⁴

我々は人間と肉によって交わるのではなく、おそらく放射によって交接するであろう。イエスは女の仕事を撤廃するために、やってきたのだ。我々もまたふたたび電氣的な神人間と似たものとなるだろうし、我々はふたたび、純粋な神となるだろう。⁵⁵

ランツのいう神（そして未来の神人間）とは、もはや肉体的な交接による生殖などしない、電氣的な存在となっている。彼の記述は、シュレーパーにおける光線交流や、その結果としての受胎というイメージとも重なる。また、先にとりあげたヴァイニンガーも、『性と性格』の最終的な目標として、性交の禁止と女性の男性化を掲げている。

全世界は、道徳的な理念のもとにある。すなわち動物たちは単なる現象であるが、象は蛇よりもより道徳的に高く評価されているし、たとえば他の動物たちを殺しても、人格として責任を問われることはない。しかし女性には責任がある。つまり他の者にならないければならないという要請がここにある。あらゆる女性性は非道徳的であるが、女性は女性であることを辞め、男性ととならなければならないのだ。⁵⁶

しかしながら、シュレーパーの脱男性化と、彼らふたりのとなえた身体を介さない生殖、あるいは性行為そのものの禁止という発想とは、根本的に異なっている。シュレーパーにおける性についての考えは、先ほど引用したように、あくまでも肉体への執着から発して

⁵³ Lanz von Liebenfels, Jörg: *Theozoologie*. Psalm 1906/ 2001, S.90

⁵⁴ ランツはまた、放射線を浴びた胎児が奇形となったことも、電子による生殖という自らの理論を補強する事実であると述べている。Ebd., S.171.

⁵⁵ Ebd., S.153.

⁵⁶ Weininger: S.452.

いる。肉体について語ることなくして、彼は男性としての自己についても、脱男性化したのちの女性性についても語ることはないのだ。人間の精神活動をつかさどる一本の神経は、身体の中を貫通している。神の光線による攻撃は、シュレーバーの内臓を幾度も切り刻んだが、そのたびに彼の体は修復されている。そして、シュレーバーは身体的女性化が完了し、神による受精ののちに、新たな人類が誕生する、という運命を受け入れている。彼はなにゆえ自らの身体を捨て去ることができなかったのだろうか。

それは、シュレーバーが魂の官能的愉悦とよぶ、性的快楽のためである。シュレーバー自身は決して同性愛願望を表明することも、自身の性欲について言及することもなかった。しかしながら、神や魂たちがシュレーバーの身体に求める、魂の官能的愉悦とは、シュレーバー自身にとっての快楽でもあり、救済でもあるのだ。

あらゆる道徳的な概念は、神と私との関係においては転倒してしまっている。通常人間にとっての官能的愉悦は、結婚という絆によって神聖なものとされ、生殖という目的に結びつけられた時には、確かに道徳的に許されるわけだが、しかしそれ自体が、自己目的化される時に、何か特に称賛に値するとみなされたことは決してない。ところが、神と私の関係において、官能的愉悦は「敬神の念の篤い」ものとなったのだ。つまりこれは、ひとたび（世界秩序に反する形で）生じたこの利害の対立について、満足の行く解決をもっとも速やかにもたらす手段が、まさに官能的愉悦であると考えなければならないことである。（285）

シュレーバーはここで、通常結婚や生殖といった、目的の為に正当化される官能的愉悦を、自分と神の場合にのみ擁護しているだけではない。驚くべきことは、彼にとって脱男性化の大きな目的とされていた、「新たな人類の創造」もまた、官能的愉悦のための方便とされてしまっているということだ。シュレーバーの身体は、官能的愉悦という快楽によって、世界と結びついている。それは彼の身体を維持し、世界秩序を回復する。それゆえ彼は最後まで身体を手放すことなく、自らの死を「いつか訪れるかもしれない」ものとして語り、また自らの遺体が火葬によって消滅することに、危機感を募らせるのである。

シュレーバーが生む性である、女性へと変身するのは、本当に官能的愉悦のためなのだろうか。そうとも言い切れない事情が一方にあることを見逃すことはできない。シュレー

バーが『回想録』の冒頭に書いているように、神とは、人間と異なりそもそも身体を持たない神経の集合とされている。⁵⁷ そして、人間の神経は、死後に神によって引き上げられ、浄化を経たのちに、神の世界に生きることになっている。⁵⁸

シュレーバー本人は、不滅の魂を持った人間であり、身体を持たない神の妻となる身なのに、なにゆえ女性の身体へと変化し、新たな人類を生み出す必要があるのだろうか。また、彼の世界観における時間のずれ（それは幻影という言葉で説明しつくすことはできない）、⁵⁹ あるいは彼自身が使う「描き出し」⁶⁰ によって表象される女性身体や、男性と女性の間でさまよう身体は、いったいどのように位置づけられるのだろうか。

5. 腐敗としての脱男性化

これまで本論文では、フロイトによる同性愛的願望という説、およびギルマンの反ユダヤ主義的な側面からの解釈を批判し、そして世紀転換期の自然科学や精神医学における性をめぐるディスクルスの混乱を取り上げてきた。ギルマンは、シュレーバーの脱男性化を、進化論的に未発達であり、男性としても脆弱なユダヤ人男子への退行の恐怖であるとした。また、世紀転換期の性科学者たちは、これまでの生産主義的なイデオロギーと規範性を強化するために、女性とその身体を再構成した。しかしながらそれは、逆に性の境界を揺るがせ、嫌悪と恐怖の対象としての女性（ヒステリー、神経病、頹落、劣等、霊媒などのイメージ）を浮かび上がらせることになった。これらの言説は、確かにシュレーバーの脱男性化という発想に、少なからぬ影響を与えていることだろう。

しかしながら、これまで見てきた性の言説が、特に女性を解体し、測定し、定義づけようという傾向を強く持っていたのに対し、『回想録』において、傷つけられ、攪乱され、変身させられようとしているのは、他でもない男性としてのシュレーバーの身体であった。この違いは、何なのだろうか。この点において、本論文は、ふたたび第1節に引用した、

⁵⁷ Vgl. Schreber: S.8.

⁵⁸ Ebd. S.12.

⁵⁹ シュレーバーは、神経病が進行した、「聖なる時期」に地球と人類の過去と未来を幻影(Vision)として何度も見せられている。Ebd. S. 63ff.

⁶⁰ 「描き出し」とは、シュレーバーが彼の周りに押し寄せる光線を欺くため、女性化した自らの姿を光線たちに向けて映し出したり、過去の記憶のなかから美しい風景を思い描いて心の慰めにするといった、精神的活動のことを意味している。

サントナーの発した問いに回帰することになる。

サントナーは、シュレーバーが『回想録』において、「どのような男性性が残っているのか」という問いに答えようとしたと述べている。そしてこの問いに答えようとすることは、彼を「腐敗の源」へと導くというのだ。サントナーのいう腐敗とは、シュレーバーがハムレットを引用している場面を念頭においていると考えられる。

私が以前に考えたことが、たとえば単なる「妄想」だとか「錯覚」だとかではないということとは疑いもないことだ。というのも、私はいまも毎時・毎日、そのことの存在を明らかに示すようなさまざまな印象を受容しているからだ。それは、ハムレットの言葉を借りれば、デンマークの国家には何か腐敗したものがある(*irgend etwas faul*)—ここでは神と人間の関係のこと—とでもいうような事態のことである。(203)

シュレーバーがいう何か腐敗した（いかがわしい）ものとは、神と人間の関係のことだという。確かに人間の不道徳の高まりは、神と人間の関係を狂わせ、世界秩序の混乱をまねいた。⁶¹ それを收拾することこそ、シュレーバーの使命となるわけだが、ここでいう腐敗のイメージは、そのままシュレーバーの身体に展開されることになる。

シュレーバーはある晩窓辺にやってきた神によって、「あばずれ (Luder)」と何度ものしられる。これは神たちの世界に通用する「根源言語」によれば、「滅ぼすべき人間に対し、神の力と怒りを感じさせるさいに、しばしば用いられる」(136)表現であるという。Luder という語には、あばずれ女という意味のほかに、獣をひきつけるための腐肉という意味もある。この Luder という語は、シュレーバーの脱男性化の結果をも言い表しているのだ。

シュレーバーは、脱男性化の初期の段階において、自らの体を「ほうりっぱなしにする」という計画があったことを報告している。

その際わたしの魂は、そのままその人物に引き渡されるのであるが、身体の方はまず女体への変身をこうむったのち、女体としてその人物に引き渡されて性的に濫用され—

⁶¹ Schreber. S.163.

—世界秩序の基盤をなす傾向を誤解した結果である——、そして更にその後はただ「放りっぱなしにされる」すなわち腐敗するがままに放っておかれることになっていたのである。(56)

この計画はのちに修正されたようだが、ここに出てくる、女体へと変身させられ、性的に濫用され、腐敗するがままに放置されるというイメージは鮮烈である。シュレーバーは脱男性化が成就したのちの女性の身体のイメージについてほとんど言及していないが、この否定的な未来としての、腐肉となった女性身体のイメージはあまりにも際立っているのだ。シュレーバーがいう「なにか腐敗した」ものとは、神との関係の中で、なぶられ、棄てられた、自分の腐乱死体だったのかもしれない。

先に指摘したように、シュレーバーの『回想録』において語られるのは、男性としての身体の破壊や解体といったことばかりであった。彼はそのたびに、神の光線を集めて身体の修復を図り——それは同時に女性性を高めることでもあった——、官能的愉悅に身をゆだねながら、のちに誕生する子孫と自らの栄誉を思い描いている。しかし同時にその身体は、何度も傷つけられ、あるいは腐乱した女体のイメージをも、纏っているのだ。そしてこの腐乱死体のイメージは、第4節において指摘した、シュレーバーにおける性と身体についての時間的、認識的なねじれと重なる。

ポイカートは死の恐怖と不死の探究が、人種論を背後から支えていたことを指摘している。⁶² すでに述べたように、生改革運動の流行や社会福祉制度の充実に伴い、ひとびとは健康増進につとめ、若さと生命力の維持を目指すようになった。しかし、そこには同時に死への恐怖があったことはいうまでもない。誰もが避けることのできない死から逃れるためにはどうしたらいいか。自然科学者や人種論的イデオログたちは、個体が滅びても滅びることのない「民族体」の保持を目標として掲げた。そのような発想は、すでに見たようにウンゲヴィッターやランツの思想、あるいはバナーが思い描いた缶詰に入れられ、寿命を超越した脳髓だけの人類⁶³ として、世紀転換期以後、いくつも現れてきた。肉体は死ぬが、そのすぐれた遺伝子は受け継がれ、不死の民族体として人々の記憶をとどめるこ

⁶² Peukert, Detlev J.K.: *Max Webers Diagnose der Moderne*. Göttingen. 1989, S. 110.

⁶³ J.D. バナー 『宇宙・肉体・悪魔 理性的精神の敵について』(鎮目恭夫 訳) みすず書房 1972年、45頁以下。

とになるだろう、という人々の希望。一方シュレーバーにおいて、個体の死はあくまで一人の死でしかない。新たな人類の発生を思い描きながらも、快楽の場としての身体を離れることができない彼は、腐敗しながら自分の身体にとどまらざるをえないのだ。

神と人間界との間に生じた腐敗を收拾することはたしかに、シュレーバーの使命であった。しかしながら、彼はその腐敗そのものを体現してしまっている。そして腐敗とは、単に身体的イメージの次元だけを意味しているわけではない。世紀転換期の医師や性科学者が、道徳的・性的腐敗に警鐘を鳴らし、それを食い止めようとしたように、シュレーバー自身も自らのおかれた時代の恐怖と戦っている。それでも彼には世界秩序を回復することも、腐敗を食い止めることもできないのだ。むしろシュレーバーのテキストに表現されているのは、腐敗そのものである。そしてこの腐敗のなかに、これまで取り上げてきた進化論、優生学、性科学、心霊主義など、さまざまな分野のディスクルの反映が見えてくるのである。

シュレーバーが生き、そして苦悩した世界、すなわちそのテキストを、一つの側面から単純化して捉えることはほぼ不可能に等しい。シュレーバーが、男性として解体され、女性として腐肉として放置されている場所は、この 100 年間に、性科学のディスクルがふさごうとしてふさぎきれなかった一つの傷、あるいは腐敗の場所を示しているのではないだろうか。そこにどのような言葉があったのか、さらなる探究が必要である。